



済さんが制作した七宝額絵

七宝焼の仕上がりは七変化 納得できる作品づくりに没頭

出石地域には、七宝焼きの作品づくりに取り組んでいる方がいます。これまで数々のコンクールや美術展で賞を獲得し、培った技術と感性で、一人でも多くの人にその魅力を知ってもらおうと取り組んでいる一人の女性を紹介します。

わたる やすこ
済 葆子 さん(61歳)出石町中村在住



昭和20年、鳥取県に生まれる。31歳の時の作品展で初めて入選し、その後、数々の賞を受賞する。日本七宝作家協会正会員の後に退会。芸術に対するセンスと探究心、大らかな性格も手伝い、交友関係は全国的に広い。日本貴金属粘土協会の講師も務める

興味本位で始めた 七宝焼

出石地域で七宝焼きの作品づくりに取り組んでいる済葆子さんは、「但馬七宝の会」の代表を務めています。同会は平成16年に発足し、作品展開催を3年毎とし、今年7月県立但馬文教府で第2回作品展を開催しました。現在、会員数は約30人です。

済さんは学生時代、友人が付けていた七宝ペンダントを見た時に、「自分も作ってみよう」と興味を持ち、8年後、七宝焼をする人に出会い、初めての七宝ブローチを作りました。以来、多分野の方々に指導を受け、作品づくりに没頭する中、失敗を繰り返しながら、技術を高めてきました。

予想外の仕上がり 一喜一憂

紀元前、中近東で発祥した七宝焼は、全世界にあります。金・銀・珊瑚・はり・しゃこ・めのう・赤珠の7種の色の寶石に似た美しい焼き物なので、日本では七宝焼と呼ばれています。金や銀、銅などの金属製の土台に、金や酸化金属で発色させた釉薬を置き、800度以上の高温で焼成します。融けた釉薬はエナメルのように

美しい色彩を放ち、観る者に感動を与えます。

七宝は、ブローチやペンダントなどの小品から壺などの立ち物、平面装飾や壁面七宝七宝額絵など、さまざまな作品が作られます。小さなものなら家庭用の電気炉で作成できるといって手軽さもあることから、趣味として楽しむ人も増えています。

済さんは「焼成と冷却の繰り返しの中には、想像を超えた世界も出現します。作品を眺めながら、自分の想いと表現とのギャップを見つめ、感じながら次のステップにつなげます。どんな作品も我が分身ですから可愛いですよ」と言葉に力を込めます。

知ってください 七宝焼きとその魅力

済さんは、七宝焼きの魅力を一人でも多くの人に知ってもらおうと、「七宝焼き教室」を定期的に開いています。

教室では、市内外からの参加者が七宝の基本を覚えた後、予めイメージしたデザインに基づいて土台の銅板を準備する作業へと進みます。その上に釉薬を置き、電気炉に入れて焼成し、作品づくりに挑戦

しています。

さらに、婦人会・地区公民館などの行事として開催される体験教室の講師を務めるなど、七宝焼きの底辺拡大にも貢献しています。

同じ失敗は二度と できない 失敗の上に成功がある

済さんに七宝焼きの魅力について尋ねると、「七宝焼きは(色)釉薬、(炎)温度、(光)光線)の芸術といわれますが、魅力といえば、複雑そうに見えて簡単そう、でも、同じものができない面白さと奥深さです。焼かないと結果は出ないので、これまで失敗もたくさんしました。逆に、予測しない結果が出る面白さに、失敗という感覚がマヒしていると気付くこともあります」と作品に優しい目線を送る済さん。七宝焼きの魅力にのめり込み、それを一人でも多くの人に伝えようとす済さんの思いが伝わってきました。



今年8月30日~9月4日に神戸市で開催された展示会。済さんの作品も並んだ

学校探検 27

強く明るく元気な

弘道小学校（出石）

案内者 川見裕樹くん



弘道小学校は、出石地域の中心部に位置しています。校区内は、通りに沿って古い商家や民家が立ち並び、城下町特有の雰囲気包まれ、この落ち着いた環境の中、232人の児童たちが学習に励んでいます。

弘道小学校に通う川見裕樹くん（6年）は、前期の児童会長を務めていました。特技はバレーボールで、週5日は練習に汗を流すほどの熱心さ。そんな元気いっぱい川見くんは弘道小学校を紹介してもら



歴史と伝統がある弘道小学校

いました。

弘道小学校は、1775年、出石藩主が開いた学問所「弘道館」の名を今に引き継いでいます。200年以上の歴史をもつ伝統ある学校です。

弘道小学校の特徴は、クラスター配置された校舎です。クラスター配置とは、教室が別々に建てられて、それぞれが廊下でつながった造りになっているものを言い、低・中・高学年棟や生活棟、芸術棟、ランチルーム棟などに分かれています。

僕の好きな学校の行事は、毎年12月に行う「もちつき大会」です。学年ごとに30キログラムのもち米を、保護者や地域の人たちと交代しながらみんなでつきます。ついたものは「きな粉もち」や「カレー雑煮」などにして食べます。

やっぱり自分たちでついたものは、とてもおいしいです。その後、地域の高齢者の家を訪問して、もちを配ります。とても喜んでくれるので、その時の笑顔を今でも覚えていました。

また、登下校する時に僕たちを見守ってくれている地域の方々に感謝の気持ちを表そうと、今年初めて7月にマリーゴールドの花を届けました。このマリーゴールドは、春に僕たちが種まきをして、その後、水やりをしながら大切に育てたものです。日ごろお世話になってる方々に、少しでも喜んでもらえればと思つて一生懸命に育てました。



児童たちが楽しみにしているもちつき大会。「僕にもつけて」

僕は、友達や地域の方々と一緒に楽しい時間が過ごせたこの学校と出石のまちが大好きです。

顔輪 笑の

津軽三味線の魅力を伝えたい

「絃隆会」（但東）

絃隆会は、津軽三味線と日本民謡のグループで、平成16年に発足し、現在の会員数は10人です。

同会代表の土肥隆良さん（但東町河本）は「津軽三味線の持つ力強くダイナミックな音色に魅かれ、日本の伝統芸能を大切に守りながら、地域の役に立てればと会員が集い、結成しました」と話します。

津軽三味線は、青森県の津軽地方で誕生した太棹（かたざお）を用いた三味線で、3つの糸を撥（はたき）で叩きつけるように弾く打楽器的奏法と、テンポが速く音数が多い楽曲に特徴があります。津軽三味線の胴体部分の皮は、主に犬の皮が使用され、撥の先端には鼈甲（かめこう）製のものが使用されています。

同会では、土肥さんが週1回、会員一人ひとりに津軽三味線の弾き方を指導し、月1回、会員みんなで津軽三味線と日本民謡の合同練習を行っています。また、今年は年に

一度の芸能発表会の他に、県内の福祉施設の慰問やイベントなどにも出演し、練習の成果を披露しました。

会員の中西 仁さん（但東町高龍寺）は「和楽器の音色に聴いてもらえることがありがたく、笑顔を見ると励みになります」と話し、会員の皆さんは「今後はいろいろな楽器との合同演奏やなじみのある曲などに挑戦して、津軽三味線の魅力を伝えたい」と口をそろえていました。



津軽三味線の練習に励む絃隆会の皆さん